

## 授業を考える(2)

・・・考えれば豊かになる・・・

2年生の国語の授業をしました。わたしが立てた授業プランをどのクラスも行う形式をとる教員研修です。教材は「かさこじぞう」(東京書籍2年下)。じいさまとばあさまがあんだかさこをじいさまが町に売りに行くがさっぱり売れず落胆して帰る途中吹雪の中のじぞうさまにかさこをかぶせます。その夜何もない正月を過ごすことになった2人にじぞうさまが米や栗を持ってくる話です。2人の明るい暮らしぶりや人を敬う心と情景描写のおもしろさや美しさが読み取れる作品です。一つひとつのことはを大事に読ませて想像したことを子どもが交流すれば、ことばの理解を図り想像力や思考力がつく構想しプランを立てました。

物語の山場を扱う授業でA4用紙にじいさまとばあさまを左右に、2人の上にじぞうさまと記して配りました。こうしたのは前時の授業でじいさまとばあさまの2人の関係図にじぞうさまも書き加えたいと子どもの求めがあったためです。そこで、授業のめあては「3人の人物関係図をつくる」としました。学習課題は教師と子どもで作るもので、たとえ教師の与えた学習課題であっても自分のこととして課題を持たせることが肝心です。ある子どもが人物関係図にじぞうさまからじいさまとばあさまに向けてそれぞれ線を引き、そこに「かさこをありがとう」と書き込んでいました。これを取り上げ、学習課題は「どうしてばあさまにもありがとうとしたのか？」にしました。かさをかぶせたのはじいさまで、ばあさまは家にいたわけですから不思議です。ここまで7時間かけて読み込んでいたので、関係図を一気に書き始めました。初めから読み返して課題は解けたのですが、ひとりの子どもが、「ということは、疑問がある。じぞうさまはばあさまがかさを作ったと知っていることになる。どうやって知ったのだろう」と言いました。課題を解決することで新しい問いが生まれると授業は活気づきます。校長先生の教える時間は今日でおしまいと言っても、続きをやりたいと譲りませんでした。

かつて6年生に詩を読む授業をしたときのことで、教科書の詩はさらりと読めて思考の高まりが期待できなかったので文語体の詩を教材にしました。思った通り難しくはじめは声に出して読みづらそうでした。音読と視写を繰り返し、そのあと色鉛筆で絵を描かせました。絵を描かせたのは遠近や色、明暗、位置関係をつかみ詩の理解の糸口になると考えてのことです。ある子どもの絵を黒板に描かせて、詩のことばとつなげて解釈を始めました。途中、「ぼくにはわからない。だれかわかるように説明してほしい」と発言がありました。これで授業が活気づきぼくはこう書いたと黒板の絵に、ここはこうではなくて強い線で濃く、それならこっちはやわらかい線だと絵を作り、ことばを根拠に静と動の対比をして新しい解釈が生まれました。授業の後、わからないと言った子どもが、「今日の先生の授業には納得した」と言いに来ました。子どもたちはこう理解するだろうからそれ以上の発見のある問いと糸口を作らなくてはと、毎日が子どもと対決しているかのような気の抜けない授業でした。

授業とは、教師が指導するだけのものではありません。授業は子どもの考えから、考えがめぐりめぐって教師と子どもの考えを豊かにしてくれることで、どちらにも財産になります。